【学位論文要旨および審査要旨】

氏　　名：川　村　仁　子
学 位 の 種 類：博士（国際関係学）
学位授与年月日：2010 年 3 月 31 日
学位論文の題名：
　グローバル政治における共和主義の機能：オートポイエーティック・システム理論分析からの考察
審　査　委　員：龍澤　邦彦（主査）
　　南野　泰義
　　齋藤　　洋（東洋大学）

＜論文内容の要旨＞

川村仁子氏の課程博士学位請求論文「グローバル政治における共和主義の機能：オートポイエーティック・システム理論分析からの考察」は、方法論と本論から成る。方法論としては、現代の分子生物学の ApS（オートポイエーティック・システム）理論を法社会学へ応用したルーマン（Luhmann）の理論を検討し、それを批判的に継承したトイブナー（Teubner）の理論と組み合わせることにより、グローバル政治の分析方法として適した理論枠組みを構築している。この方法論の枠組みを明確にした上で、本論として、古代ギリシアから近代ヨーロッパまでの「共和主義」という言葉で語られてきた思想の核を構成する共通要素を見出し、これに ApS 理論を適用して、国家間政治、制度化された国際政治、グローバル市民社会の 3 つのサブ・システムにより構成されるハイパー・サイクル（第一の下部システムの自己産出サイクルが第二のそれと連結することでその産出の条件を保証することにより、システム全体の循環的な産出が可能になること）としてのグローバル政治システムにおける共和主義の機能を明らかにした。

＜構成＞

本論文は二つの部分から成っている。一つは、ApS システム論を用いた理論分析の枠組み（政治、イデオロギー、学術の各システムのモデル）の作成であり、他の一つは、この論文の核となる部分で、①恣意的な支配からの自由、②共通項としての有徳な人格概念の形成、③共通善の実現、により特徴づけられる共和主義が、現代のグローバル政治システムにおいてどのように機能しているかを明確化することである。川村氏は、これを、既述の理論分析の枠組みたる政治、イデオロギー、学術の各システム・モデルと国家間政治システム、制度化された国際政治システム、グローバル市民システムの三つのサブ・システムから成るグローバル政治システムとを対応させることにより行おうとしている。本論文の構成は次の通り。

序章
第 1 章　グローバル政治の分析方法としてのオートポイエーティック・システム理論
　第 1 節　オートポイエーティック・システム理論の概説
　　(1) 機能－構造システムへの転換
　　(2) オートポイエーティック・システム理論の特徴
　　(3) システムとしての社会とコミュニケーション
　　(4) 社会システムの分化
　第 2 節　オートポイエーティック・システム理論分析による理論枠組みの形成
　　(1) 政治思想に関わる機能分化システム
　　(2) 政治理論、政治思想、政治イデオロギーの関係性
　　(3) グローバル政治システムの 3 つのサブ・システム
　　(4) 国際関係学からの批判への反駁
第 2 章　共和主義的コミュニケーションの歴史的変遷とシステムとしての共和主義
　第 1 節　共和主義的コミュニケーションの歴史的変遷
　　(1) 都市国家アテナイとアリストテレス
　　(2) 共和政ローマとキケロー
　　(3) 中世北イタリアのコムーネとマキャ

ヴェッリ
(4) 近代以降の共和主義的コミュニケーション
第2節　共和主義的コミュニケーションの共通要素
(1) 共和主義の古典性
(2) 共和政体
(3) 市民概念
(4) 共和主義的コミュニケーションの思想的支柱
第3節　共和主義のオートポイエーティック・システム理論分析
(1) システムとしての共和主義
(2) 共和主義システムの機能分析のための理論枠組みの形成
第3章　グローバル政治における共和主義の機能
第1節　国家間政治システムとの共鳴
(1) 国家間政治システムにおける支配からの自由
(2) 外部観察から生じる共和主義システムのコミュニケーション
(3) 新たなサブ・システムへの分化
第2節　制度化された国際政治システムとの共鳴
(1) 制度化された国際政治をめぐるコミュニケーションの機能分出
(2) 世界市民概念
(3) 制度化された国際政治システムの新たな試み
第3節　グローバル市民社会との共鳴
(1) グローバル市民社会の秩序形成のためのグローバル法
(2) グローバル法の妥当性確保のための理論
(3) 3つのサブ・システムのハイパー・サイクル・モデル
終章
参考文献

＜各章の概要＞

序章では、共和主義に関する用語の語源的説明をも含めて、古典古代にその起源を有する政治思想としての共和主義が、現代の政治学におけるリベラリズム（ここでは、国内的には、国民の自由に干渉せず、国民の要求実現のための実干渉することができるという政治思想であり、国際関係においては、国家が、対外的な独立性と対内的な絶対性の下に、国益の実現のために行動するという政治思想を意味する）の再検討の機運の中で、ポーコック（Pocock）やペティット（Pettit）、オナフ（Onuf）等により再評価されつつあることに注目している。徹底して機能分化した政治システムが、閉鎖的でありつつも、同システムにとって環境を成す学術あるいはイデオロギーの諸システムの作動（operation）を外部観察した結果を自己のメカニズムに従って自己の内に取り込んでいくということから、理論と実践の二項対立を解消する理論とされる、オートポイエシスに基づくモデルを用いてグローバル政治という実際的な文脈における共和主義の機能を明確にすることでより高次の政治行為の観察への寄与を試みる旨を表明している。

第一章では、現代のグローバル社会を分析する方法論として適しているルーマンやトイブナーのApS理論を基に、政治思想の機能分析に適した独自の学術、政治、イデオロギーの三つのシステム・モデルを組み立て、その特徴を概説し、グローバル政治における政治思想の機能を分析する理論枠組みを形成した。

ApS理論とは現代の分子生物学の成果を社会科学に取り入れたもので、構成主義に属するとみなされている。コミュニケーションを社会の基本的な構成要素と考え、システムの本質を一のシステムと環境（この中に一のシステム以外のすべてのシステムが含まれる）に区別することにより複雑性を縮減することにあるとし、この区別はコードにより行われ、区別の基準はプログラムにより決定される。システムは固有値により安定する。システムは基本的に閉鎖的であり、環境からのインプットもアウトプットもなく、外部観察、共鳴（resonance）、カップリング、作用（performance）という方法でのみ環境と関わりあうことができる。システムは更にサブ・システムに分化し、こ

れらのサブ・システムがハイパー・サイクル（第一の下部システムの自己産出サイクルが第二のそれと連結することでその産出の条件を保証することにより、システム全体の循環的な産出が可能になること）に連結することでオート・ポイエーティックなシステムが生ずる。これらのオートポイエシスに関する基本的な説明をした後に、川村氏は以下の様に主張する。政治思想に関わるシステムとしては、学術システム、イデオロギー・システム、政治システムの３つが想定でき、それぞれ、「真／真でない」、「論争的／論争的でない」、「統治／非統治」、がシステムと環境を区別する「コード」となる。また、選択の根拠の提示、権力の獲得と保持、集団を拘束する決定、を社会システム全体におけるそれぞれのシステムの機能とする。学問としての政治思想は、学術システム内に位置する。学術システムにおける政治思想は、政治システムにおける政治理論の外部観察である。また、イデオロギー・システムは学術システムを外部観察することによって、政治思想を政治イデオロギーとしてシステム内に取り込む。また、政治システムはイデオロギー・システムにおける政治イデオロギーを外部観察することによって、政治理論としてシステム内に取り込む。そして、その政治理論は学術システムによって再び外部観察され、政治思想としてシステム内に取り込まれる。また、政治システムは学術システムにおける政治思想を外部観察することによって、自己観察に利用することができる。

この様な ApS 理論を、グローバル政治の分析方法として用いることに対する、既存の国際関係学からの批判（用語の使用方法の相違、政治を中心としない点、歴史認識、機能に基づく分析である等々）に対して、以下の理由で、川村氏は、これらが認識の錯誤から生ずる批判であるとする。現在のグローバルな社会は国家間の関係によって形成されている一方で、政治、経済、法等に機能分化した各分野のグローバルな社会の束として理解することができる。このようなグローバルな社会は中心的役割を担う組織を持たない。そこで、グローバル時代の多中心的社会の分析に適用可能な新たな方法論として ApS 理論が有効となるのである。ApS 理論と既存の国際関係学は、互いに否定し合うのではなく相互補完的な関係にある。社会には多角的な視点からの観察が複数存在するということこそ、ApS 理論の社会分析なのである。

第二章では、川村氏は政治思想としての共和主義的コミュニケーションの歴史的変遷を追い、それらの共通要素を見出すことにより、共和主義を ApS として捉え、グローバル政治における共和主義の機能を分析する理論枠組みを形成しようと試みる。古代ギリシア、共和政ローマ、中世北イタリアの自治都市（Comune）、18 世紀頃のイギリス、フランス、アメリカにおける政治とそれを観察する学者達による共和主義的コミュニケーションの歴史的変遷を追い、政体論としては①共通善の実現を目的として形成された包括的政治共同体、②支配からの自由を獲得するための政体、③恣意的な権力の行使を抑制するために法の支配を尊重する点を、市民概念としては①血統よりも徳をその要件とする、②市民権と政治への直接参加権の不一致、③コミュニケーションのための多様な個人の共通項であるという点を、それぞれ時代を超えた共和主義的コミュニケーションの共通要素として導き出している。

これらの共通要素を基に政治思想としての共和主義的コミュニケーションを学術システムのサブ・システムとして分析し、共和主義システムが他の機能分化システム（イデオロギー・システム、政治システム）とどのように共鳴するのかを明らかにするための理論枠組みが提示されている。川村氏によれば、システムとしての共和主義は、学術システムのサブ・システムである政治学システムのサブ・システムとして位置づけられ、それ故、学術システムのコード、プログラム、固有値、機能が適用される。共和主義的コミュニケーションの共通要素により、共和主義が他の政治思想と区別されるのは、その政体論及び市民概念論の思想の根底に「徳」を置く点であり、従って、共和主義システムのコードは「徳の構造化／徳の構造化

でない」になる。コードの内容を決定するものは、プログラムとしての「共通善の実現」という理論である。政治思想としての共和主義システムと政治システムにおける統治理論としての共和主義は区別され、区別されることによって現実を再統合する政治思想としての共和主義システムの機能は統一化される。そして、実践としての共和政を外部観察することにより、共和主義システム内に反省理論を発展させる。このような他のシステムに対する開放性と、構成要素を自ら産出するという因果的閉鎖性のなかで、共和主義システムは自己産出と自己保存の円環を形成する。そして、共同体を形成しようとする個人の協働性を、より厳密に言えば個人の協働性の論証可能性を固有値（システムの安定要素）として、自らのシステムの安定を維持する。社会システム全体からは、支配からの自由の獲得と保持の理論の提供が、共和主義システムの「機能」として観察できる。

川村氏によると、この共和主義システムが、グローバル政治システムの３つのサブ･システム（国家間政治システム、制度化された国際政治システム、グローバル市民社会システム）の作動を外部観察することで互いに共鳴することによって、国家だけでなく、社会的権力による「恣意的な支配からの自由」の獲得と維持の理論、共同体を形成する構成員の共通項としての有徳な「市民」概念によるメンバーシップの理論、共通善の実現のための理論等に関するコミュニケーションを行い、それが自らのシステム内の作動となる。

第３章では、第１章、第２章で形成した、グローバル政治における共和主義の機能を分析するための理論枠組みを基に、共和主義システムとグローバル政治システムの３つのサブ・システムとの共鳴のメカニズムを検討し、グローバル政治システム内の３つのサブ・システムへの分化の契機となり、サブ・システム形成後はそれらを支える理論を提供する共和主義システムの機能を明らかにしようとしている。

川村氏によると、国家間政治システムとの共鳴では、共和主義システムが、当該システムを支える理論と制度化された国際政治システムへの分化の契機となる理論を、国家間政治システムに提供していることが観察できる。領土的主権の原理の下で成立した、近代国家による国家間政治システムを外部観察する共和主義システムの「支配からの自由」の理論は、国家間政治システムにおける国家の独立性確保の理論となり、また、「有徳な市民による政治」という理論は、代表者によって行なわれる外交による統治を支える理論になる。共和主義システムは、対外的には国家の独立性、対内的には専門家によって行われる外交への妥当性付与という形で、国家間政治システムを支える理論を提供する。また、イデオロギー・システムで生ずる国家間による戦争反対のイデオロギーを外部観察する共和主義システム内では、徳と理性を有する国家が協働することによって、永遠平和を実現することを求めるコミュニケーションが生じる。共和主義システムとイデオロギー・システムの共鳴は、国家間政治システムと共和主義システムの共鳴を促進することになり、国家間政治システムは、共和主義システム内で行なわれる国家間政治のあるべき姿についてのコミュニケーションを、自らのあるべき姿として外部観察することにより、自己反省を行い、制度化された国際政治についてのコミュニケーションを始めることになる。そして、共和主義システムと国家間政治システムとの共鳴は、グローバル政治システムが制度化された国際政治システムへ分化するコミュニケーションの基盤を醸成する。

川村氏によれば、制度化された国際政治システムとの共鳴では、共和主義システムは、制度化された国際政治システムを支える理論を提供すると共に、グローバル市民社会システムへの分化の契機となる理論を提供することが観察できる。第一次世界大戦以降、国家間政治システムは自己反省の作動として、世界規模での悲惨な戦争を再び引き起こさないために、制度化された国際秩序（集団の構成員により容認される基本的な理念を含むが故に永続する、権力により創設される社会構造）の形成を模索した。場当たり的な国家間政治とは

異なる、永続的かつ安定的な、理念を核とするコミュニケーションがグローバル政治システム内で生じることにより、グローバル政治システムは新たなサブ・システムに機能分化し、国家間政治とは異なる機能を持ち始めた。国家間政治システムと制度化された国際政治システムは、その構造においてカップリングし、制度化された国際政治システムが国家間政治システムで行なわれるコミュニケーションにおける複雑性を縮減する機能を果たすことにより、互いにハイパー・サイクルを形成する。

制度化された国際政治システムが機能分化した後も、共和主義システムは現代の制度化された国際政治システムを外部観察し、自らのシステム内で制度化された国際政治システムの「理想像」についてのコミュニケーションを行なう。共和主義システムは、国家間の秩序は特定の国家による恣意的な支配ではなく、理性ある諸国家の代表により形成された国際法や国際制度によって統治される必要があり、その目的は共通善の実現であるというコミュニケーションを再生産する。共和主義システムは、これらをグローバルな共通利益として実現されるべきものであるという認識を高め、制度化された国際政治システムに対し諸国家に協働を求める理論を提供する。また、共和主義システムは制度化された国際政治システムに対し、グローバル政治システムにおけるコミュニケーションの帰属先を国家や政府間の国際組織だけではなく、世界市民としての個人にまで還元する理論を提供する。一方、イデオロギー・システムは、自らのシステムを支える理論として世界市民概念を用いることで共和主義システムと共鳴している。国や民族を超えた世界市民によって構成される民間の国際組織は、グローバルな社会における世界市民としてコミュニケーションを行なう。グローバル政治システムは、このようなイデオロギー・システムのコミュニケーションを外部観察することで、新たなサブ・システムとしてのグローバル市民社会システムへ機能分化する契機を獲得するのである。

グローバル市民社会との共鳴では、共和主義システムはグローバル市民社会における民間国際組織の自主規制を促進する理論及び、そのような自主規制に対して法としての妥当性が与えられるように発展するための理論を提供する。共和主義システムは、各機能分化システム（経済、医療、スポーツ、情報等）と作動的・構造的にカップリングしているグローバルな民間組織が、公的な立法過程に頼らずに自主規制を行うようになり、それらがグローバル法として認識されているグローバル市民社会システムのコミュニケーションにおいて、公的な法に縛られない恣意的な権力が生じることを観察する。そして、その様なグローバル市民社会システムのコミュニケーションに対して、恣意的な支配からの自由と法による支配を求めるコミュニケーションを行なう。更に共和主義システムは、その妥当性確保が課題であるとされているグローバル法の形成過程を外部観察することによって、グローバル法の形成過程における正当性（legitimacy）原理たる民主主義的決定メカニズムの欠如を補い、グローバル市民社会システムの法規範形成の動きに対して妥当性（validity）を付与する理論を提供するコミュニケーションを行なう。

川村氏によると、そのコミュニケーションの一つは、「恣意的な支配からの自由」のための有徳な「人格」による自治である。グローバル政治システムの他のサブ・システムでは、コミュニケーションが帰属する「人格」は、「市民」やその「代表者」に限られていた。しかし、グローバル市民社会システムでのコミュニケーションは、他の機能分化システムと作動的・構造的にカップリングしているために、多様な「人格」に帰属している。共和主義システムは、それぞれの機能システムにおける「人格」を、共和政体における「市民」に対応するものとして捉え、それぞれの機能システムにおける有徳な「人格」が専門家として秩序形成に携わることにより、「決定に拘束される者が何らかの形で決定に参加する」という民主主義の制度を補完できると考える。直接その決定に参

加しない者は、自らの立場において間接的に参加することができる。この共和主義的コミュニケーションは、政治に対する関心が失われつつある現代において、「市民」という「人格」に縛られることなく、身近に関係する分野での秩序形成に、個人が多様な「人格」として参加する契機になることができるだろう。また、共和主義システムはグローバル市民社会システムに対し、人の支配ではなく法（ここでいう法は自然法あるいはデュギイの言う客観法に近い）の支配を重視するコミュニケーションを行なう。それ故、グローバル市民社会全体の利益を反映し、かつ国家及び社会的権力の「恣意的な支配からの自由」のための根本規範となるグローバル法の確立を求める。この様な共和主義システムのコミュニケーションは、グローバル市民社会システム内での根本規範及び異議申立て機関の設置に関するコミュニケーションの契機となる。

＜論文審査の結果の要旨＞

川村仁子氏の博士学位請求論文「グローバル政治における共和主義の機能：オートポイエーティック・システム理論分析からの考察」について、公開審査過程を含む審査過程で明らかになった特徴及び評価は次の通りである。

＜論文の特徴＞

（1）本論文の特徴は、何といっても先ず、従来、その機能主義的な特性の故に、空間主義的な分析をも含む国際政治学理論には適さないとも言われていたApS理論を、その特性を利用して、理論と実際の二項対立を止揚する理論として見事にグローバル政治の分析に用いたことである。

（2）共和主義の再評価にあたって、再評価をする側においても、共和主義はもはや歴史的な遺産に過ぎないという見方もあったが、川村氏は共和主義を活きている思想として捉え、グローバルな政治システムを構成するサブ・システムのハイパー・サイクルな連結を促進する媒体としての有効性を論証した。

（3）特に、共和主義を、グローバル政治のサブ・システムであるグローバル市民社会システム内で構成されつつあるグローバル法（文化、社会、経済システムといった周辺部で民間が作り出す法）の正当性たる若干の民主主義的要素を補完する妥当性根拠として共和主義を援用している。

（4）共和主義、共和政、共和制の三つを明確に区別した上で、政治思想としての共和主義の本質、特徴をその古典古代における起源にまで遡って、明らかにしたことである。

（5）博士論文としては、当然のことと思われるけれども、理論的視点を定めて、一次資料にあたって分析を行っている。第三章では、自己の理論の証明に様々な事例を挙げている。

（6）第三章のグローバル政治システムの三つのサブシステムの考え方に関して、国家間政治システムと制度化された国家間政治システムについては、ハーグ国際法アカデミーの議長を務めたフランスの国際法学者Prof. René Jean Dupuyの考え方を下敷きにしながら、それをApS理論の人格論（personality argument）を含むコミュニケーション論により、一層発展させたものにしている。

＜評価＞

（1）従来難解と言われていたApS理論を良く理解し、これを用いた前例の少ない国際政治学におけるシステム分析を行った点は、独創性の点で最高の評価に値する。

（2）特に、イギリス等においては、国際関係論の観点から、ApS理論の適用を否定する研究書も出て、機能主義的なApS理論は空間的な分析をも含む国際政治学あるいは国際関係論には適用困難という批判は強かったが、川村氏は、見事に、これらの批判を論駁し、これらの批判に耐え得るシステム・モデル理論を構築している。

（3）古典を含む一次資料を良く渉猟し、原典に拠り解読を試み、これに成功している。このことは、論文の主題の部分に厚みを加えている。

（4）共和主義の歴史認識の点に関して、過去を現在に媒介するというH.G.Gadamerの歴史理解

の解釈学（*Wahrheit und Methode*, J.C.B. Mohr, 1960）を参照して、歴史的な概念を現在の脈絡において再構成することで共和主義の概念枠組みを形成している。

（5）グローバル法の正当性（legitimacy）根拠たる民主主義的要素を補完するために共和主義的要素を妥当性（validity）根拠として使用したことである。これは、世界的にこの分野の研究を見ても、全く新しい初めての理論的視点を提供するものである、と同時に、共和主義的要素が現在でも必要とされる活きた思想であることを実証するものでもある。

（6）最初に分析モデルを構築して理論的な視点を明確にした後に、本題の分析に入っている点、その構成の論理性と論旨の一貫性等、どの点をとっても高い到達点を示している。今後の一層の研究努力の積み重ねによる将来的な展開が期待される。

審査過程で、南野泰義副査より示された所見は以下のとおりである。

川村仁子氏の課程博士号請求論文についての所見

2010年7月4日

副査　南野泰義

川村仁子氏の課程博士号申請論文「論文学位論文名グローバル政治における共和主義の機能：オートポイエーティック・システム理論分析からの考察」について、本論文は、オートポイエーティック・システム理論を用いて、共和主義の思想史的変遷を国際関係の中に位置づけるとともに、国際関係における共和主義の今日的な意義を解明しようとした意欲的な論文である。また、本論文は、国際関係における共和主義の機能を解明するに際し、国際関係の思想史の展開に対応した構成となっており、古典および膨大な諸研究および日本の研究状況を踏まえ、緻密な論理の整理と思想的、哲学的背景の分析が施された手堅い理論研究であり、完成度の高い論文であると評価することができる。

なお、国際関係理論にオートポイエーティック・システム理論を適用することの意義をよりいっそう明確にし、オートポイエーティック・システム理論批判への反批判をよりシャープにすることが望まれるが、論文全体の意義を損なうものではない。今後の課題としては、理論研究として本論文の成果を踏まえた実証的研究が期待されるところである。以上、川村仁子氏の本論文は課程博士号に値する優れた研究成果であると言える。

また、東洋大学法学部教授齋藤洋副査の所見は次の通りである。

川村仁子氏の課程博士号請求論文についての所見

2010年7月7日

学外審査員　副査

東洋大学法学部教授・法学博士　齋藤　洋

≪評価≫

本論文が甲論文（課程博士学位審査請求論文）であることから、第一に問題設定の妥当性、第二に研究方法の明確化と習得程度、第三に論文構成の妥当性と当該分野における独創性、以上の三点を中心に審査した結果、次のように評価することができる。

第一の問題設定の妥当性について、政治思想としての共和主義が古代から現代に至るまで一貫して有意な機能を果たしてきたということを、古典を含む内外の多数の文献を渉猟しながら論証しようとする問題設定は、非常に基礎的でありながらも国際関係思想史の中核に位置づけられる一種の王道を歩むものであり、これまでの共和主義研究をさらに進展させるものと評価することができる。

第二の研究方法の明確化と習得程度について、社会学のいわゆるシステム論に含まれるオートポイエーティック・システム理論（以下、「ApS理論」という。）を本論文は用いている。このApS理論はもともと生物学において創始されたオートポイ

エシスという発想を、そこにおける細胞間の共鳴やコミュニケーションという概念とともに社会分析に応用したものであり、ルーマンやトイブナーらによって発展している理論であるが、これを国際関係学あるいは国際関係思想史の論証に応用し、政治思想としての共和主義の機能の分析に果敢に挑戦することで、研究方法の明確化と、ApS理論の充分な習得を証明したものと評価できる。

第三の論文構成の妥当性と当該分野における独創性について、最初に研究対象を、研究の必要性についての理由とともに示し、次にそこで使用する方法を、その説明を含めて明示し、続いて当該方法を用いて分析を行い結論に至るという、奇をてらうことのない極めてオーソドックスな論文構成となっている。それとともに本論文は単に政治思想としての共和主義に関する歴史分析に留まることなく、そこからグローバル法の発展という状況と社会認識に拡大せざるを得ないことにまで論及している。その用語法等には難解な部分もあるが、共和主義を国際関係学の中だけで完結させるのではなく、法分野まで含めて考究することで、共和主義の中心概念となる「徳」あるいは「徳性」の非明確性ならびに民主制度の有無という、法学研究の視点からは極めて重要な論点ないし課題を浮かび上がらせることにも成功しつつ、現段階では、当該問題に対してはハートの一次規範と二次規範という考えを組み込むことによって、グローバル法の現実性を論理的に担保しようと試みている点は、高く評価されるところでもあり、国際関係学におけるApS理論の有用性をも同時に論証していると判断できる。

加えるに、口頭試問においても質問に対して熟慮しながら的確に応える過程および内容から、研究者たるにふさわしい充分な語学力とともに本論文に表現されている以上の資料・文献の読み込みと深い考察を推し量ることができたものといえる。

もちろん本論文には今後の課題となるような諸点も散見され得るが、本論文が甲論文であることを考慮するならばそれらは望蜀の点であり、学位請求論文としての本論文の価値を決して損なうものではなく、むしろ大学院博士課程在籍中に本論文のような理論的に高度で完成度の高い研究をまとめ上げたという事実は、称賛に値するものと言い得るであろう。

以上のことから、研究対象たる問題の設定に妥当性があり、研究方法を習得し、それを実際の研究に応用し得ること、ならびにその研究成果が当該分野において着実でありながらも極めて独創性に富むものであると評価でき、したがって被審査者が研究者として独立して歩み得ることを充分に証明し得る論文であると思料し、博士学位を授与するに相応しい学術論文および研究成果であると結論付けることができる。

以上の様に、本論文については、今後の川村氏の研究の展開が期待される部分についても言及されたが、このことは論文全体の価値を減ずるものではない。これらの点は川村氏の今後の一層の研究の積み重ねにより明確にされていくべきものであって、本論文の意義を損なうものではない。

審査委員会は、3名による審査に加え、2010年6月28日12時30分より14時まで、洋々館第957号教室において公開審査会を実施し、本学国際関係研究科博士課程後期課程の在学中における研究活動、及び本課程博士号申請論文に関する本人からの詳細な報告を基に忌憚のない意見交換や質疑応答を行った。公開審査会の質疑応答を通じて、川村仁子氏が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。その結果を踏まえ、審査委員会は一致して、本論文が博士学位を授与するに相応しいとの結論に達した。

＜試験または学力確認の結果の要旨＞

本論文の提出者は、本学学位規程第18条第1項の該当者であり、論文内容および公開審査会での質疑応答を通じて、本論文提出者が十分な学識を有し、課程博士学位に相応しい学力を有していることを確認した。また、本研究に必要とされる

諸外国語のものを含む一次資料および先行研究の文献を参照している点、古典語（ラテン語、古典ギリシア語）の成果がギリシア、ローマや中世あるいはルネッサンス期および近代の古典の原典読み込みを通じて本論文に十分に生かされている点からして、語学能力も十分有していることを確認した。

以上の諸点を総合し、本論文提出者に対して、「博士（国際関係学　立命館大学）」の学位を授与することを適当と判断する。